様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２４１４
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２０５８７

研究課題名（和文）トランスジェンダーの子を持つ親への心理的援助プログラムの開発

研究課題名（英文）Study on the psychological aid program for parents with transgender children

研究代表者
堀川　聡司（HORIKAWA, Satoshi）

目白大学・心理学部・客員研究員

研究者番号：６０７５５９４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：トランスジェンダーの子を持つ親へ行ったインタビュー調査から、FTMの子を持つ親は、カミングアウト以前にも子育てをめぐって様々な衝突や葛藤を経験しており、それがその後の心理的変遷の土台となっていることが示唆された。子のジェンダーに直面する以前の子とのやりとりや、家族サポートが充実したものであればあるほど、自身のセクシュアリティ観の再構築、ひいてはジェンダーに悩む子の心理的受容に前向きになれるという傾向が示唆される。
この考察は、老年期の性を単なる衰退や消失ではなく、乳幼児期に端を発するセクシュアリティ体験の一貫として捉える精神分析学的な視座を援用している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
昨今のLGBTQへの社会的認知度は飛躍的に向上しているとはいえ、当事者の心理的な苦痛、親の対応の難しさは変わらずあるのが現状である。本研究より、FTMの子をもつ親とMTFの子をもつ親とでは質的に大きな差異があり、その心理的変遷も親個人の幼年期より培われたセクシュアリティ観が大きく影響していることが示唆された。
これらの研究結果は、当事者や親の心理面を支援する援助職の臨床上のヒントとなるだろう。

研究成果の概要（英文）：From interviews conducted with parents who have transgender children, it was suggested that parents of FTM (Female-to-Male) children have experienced various conflicts and struggles in parenting even before their child's coming out, and these experiences serve as a foundation for their subsequent psychological transition. The interactions with their child prior to confronting their gender and the level of family support play a significant role. The more supportive the family environment and the stronger the pre-confrontation relationship with their child, the more positive their ability to reconstruct their own sexuality and, consequently, their psychological acceptance of their child's gender concerns.
This analysis applies a psychoanalytic perspective that views sexuality in old age as a continuum of sexuality experiences that originate in early childhood, rather than simply as decline or disappearance.

研究分野：臨床心理学

キーワード：トランスジェンダー　親子関係　中年期危機　精神分析　ジェンダー論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

割り当てられた性別と自分がそうだと思う性が一致しないトランスジェンダーの人は、社会的な通念の異なる生き方を強いられるため、多大な苦痛が生活全般に及ぶことが知られている。そのため、トランスジェンダーの医学的、心理的、社会的な研究やサポートはこれまで国内外で盛んに構築されてきている。

しかし、トランスジェンダーに関して、悩むのは当事者だけではない。当事者の周囲の人、とりわけトランスジェンダーの子を持つ親もカミングアウト以降、様々な出来事に大きな動揺・葛藤を経験する。それらは、自身の持つセクシュアリティ観の解体と向き合うことでもあるからだ。トランスジェンダーのメンタルヘルスには、その理解者の如何が重要と言われる以上、本人の親の心理的葛藤やその解消を考えることは親本人のみならず、トランスジェンダー当事者である子を支えることにつながる射程を持つ。それゆえ、トランスジェンダーの子を持つ親のカミングアウト後の心理面を研究することの意義が少なくないと考えられる。

２．研究の目的

トランスジェンダーの子を持つ親は、カミングアウト以降、様々な出来事に大きな動揺・葛藤を経験する。それらは、自身の持つセクシュアリティ観の解体と再構築によって（＝昇華のプロセス）、あるいはそれらの葛藤から距離を取ることによって解消されてゆく。それらは多分に個別的な背景や事情が関与していると考えられる。

本研究では、①トランスジェンダーの子をもつ親はどのような心理的負担を持つものなのかを考察し、②その後のプロセスがいかように展開するかを質的に明らかにし、③臨床心理学的な支援をする上で有効な支援のプログラムを構築することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は以下の 3 つの研究手法をとる。

（１）「文献調査」：ジェンダー論、中年期～老年期の心理臨床、精神分析などの文献の読解することによって、インタビュー調査における予備調査として仮説を生成する。

（２）「インタビュー調査」：トランスジェンダーの親を中心として結成された自助グループの会員数名を対象に、半構造化面接によるインタビュー調査を行う。文献調査に準拠した上で、親自身のセクシュアリティ観の変遷に注目し、各々の昇華のプロセスを明確にする問いを投げかける。そこから、どのような心理的変遷を辿るか、またそれぞれのポイントでどのような援助が有用であったかを考察する。分析にあたっては、TEM（複線径路・等至性モデル）による質的分析を用いて、時間の流れによって変遷した心理的プロセスをより綿密に組み取ることを目指す。

（３）「事例研究」：筆者が臨床心理士・公認心理師として実際に携わっているケースに関して検討する。中には、面接経過の中でロールシャッハ・テストを用いたものもあるので、その結果を量的・質的に多面的に分析する。

４．研究成果

（１）老年期のセクシュアリティに関する仏語文献の邦訳を刊行した（ブノワ・ヴェルドン著『こころの熟成―老いの精神分析』（白水社）。老いは自身のセクシュアリティ感の変容が迫られる経験である。本書第四章では、老年期を迎えた人が、身体の衰え、子との力関係の逆転などの変化を通じて、いかようにセクシュアリティ観が変容するかがつぶさに描写されている。老年期のセクシュアリティについては既に様々な見地から言及されてきた領域であるが、精神分析的な見地から人生全体の一部として語られることは少なくとも本邦では前例のないことであった。それはすなわち、老年期のセクシュアリティを単なる衰退や消失と捉えるのではなく、乳幼児期に端を発するセクシュアリティ体験の一貫として捉える視座である。トランスジェンダーの子のセクシュアリティと如何に対峙するかを考える本研究にとってもこの知見は非常に意義のあるものである。というのも、子のセクシュアリティがどうであれ、中年期～老年期とは自身のセクシュアリティ観の変容に迫られる時期であり、その理論的な土台の上で本研究も考察を加えていかねばならないからである。

（２）トランスジェンダーの子を持つ親が集う当事者団体のミーティングへの参加し、そこで今日的な事情や悩み事についての情報収集を行った。その中で、昨今の LGBT ブームの関係で一般的な認知度は飛躍的に向上しており、そのために生活しやすい環境ができている声もある一方

で、当事者の心理的な苦痛、親の対応の難しさは変わらずあることが確認された。
　個別の親の話を伺う中で、FTM（女性として生まれ育ち、男性と自己規定する人）の子をもつ親の場合と MTF（男性として生まれ育ち、女性と自己規定する人）の子をもつ親とでは、質的に大きな差異があることがまず分かった（そのうえで、本研究では FTM の子を持つ親の調査に絞ることにした）。
　FTM の子を持つ親は、カミングアウト以前にも子育てをめぐって様々な衝突や葛藤を経験しており、それがその後の心理的変遷の土台となっている。具体的には、子のジェンダーに直面する以前の子とのやりとりや、家族サポートが充実したものであればあるほど、自身のセクシュアリティ観の再構築、ひいてはジェンダーに悩む子の心理的受容に前向きになれるという傾向が見出された。

（３）臨床研究として報告したのは、以下の１つのケースである。具体的には、トランスジェンダーと診断されるには至らないものの心理士のもとを訪れた人に対して行ったアセスメントを事例論文としてまとめた。アセスメントにあたっては「ロールシャッハ・テスト」を主に用いた。そこからはセクシュアリティやジェンダーに関する明瞭な指標は浮かび上がってこなかったものの、クライエントが抱える対人関係上の困難や不安の性質が浮き彫りになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 堀川聡司・大川ふみ	４．巻 18
２．論文標題 性別違和を抱くクライエントのアセスメント―ロールシャッハ・テストの分析を通して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 目白大学心理カウンセリングセンター年報	６．最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堀川聡司	４．巻 47(2)
２．論文標題 オンライン面接の技術	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神療法	６．最初と最後の頁 196-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堀川聡司	４．巻 39(1)
２．論文標題 精神分析的心理療法の設定とセラピストの欲望	５．発行年 2021年
３．雑誌名 心理臨床学研究	６．最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堀川聡司	４．巻 21(3)
２．論文標題 オンライン設定における心的空間の平板化と拡張	５．発行年 2021年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 320-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀川聡司	4．巻 65(4)
2．論文標題 精神分析の「起源」の探究 ： ジャン・ラプランシュの仕事	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神分析研究	6．最初と最後の頁 334-341
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀川聡司	4．巻 22(5)
2．論文標題 転移	5．発行年 2022年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 556-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀川聡司	4．巻 15(2)
2．論文標題 ひそかに自分が嫌い	5．発行年 2022年
3．雑誌名 心理臨床の広場	6．最初と最後の頁 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀川聡司	4．巻 40(5)
2．論文標題 あの時ここで(here and then)の解釈	5．発行年 2022年
3．雑誌名 心理臨床学研究	6．最初と最後の頁 393-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 堀川聡司
2．発表標題 マシュド・カーンのスキゾイド論
3．学会等名 日本精神分析学会第65回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 堀川聡司
2．発表標題 ＜ふつう＞の構造
3．学会等名 日本心理臨床学会第39回大会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 ブノワ・ヴェルドン著、堀川聡司・小倉拓也・阿部又一郎訳	4．発行年 2021年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 183
3．書名 こころの熟成―老いの精神分析	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関